

BPファシリテーター体験記 東京都三鷹市

新米ファシリテーター はじめのいっぽ (一歩) !

三鷹市社会教育会館 保育士 曾我 克美

納得いく「支援」を探して

灼熱の太陽がじりじりと照りつける今年の異常ともいえる暑さの中、私の初めてのBP(赤ちゃんがきた!)がスタートしました。平成23年の夏、東京1期生として養成講座を受け、是非自分の職場で実施して多くのお母さん達に届けたいと強く願ってからちょうど2年が経っていました。

私は、保育士として保育園で20数年過ごし、次に児童館を経て今の職場へと異動してきました。保育園では乳幼児期の子ども達、児童館では小学生や思春期を迎えた中高生達…と、まるで子どもの成長を辿るかのような仕事の流れでした。

その間、子ども達が抱える様々なつまずきやそこから発生する問題行動と向き合い寄り添うたびに「赤ちゃんの時期に戻ってやり直しができたらどんなに楽だろう」と思っていました。人生の出发点で「愛されている実感」「人を好きになれる、信頼できる心」「明日を生きようとする意欲」の素さえ備わっていれば、後につまずいたとしても充分起き上がるエネルギーになると日々の実践から実感していました。しかし子どもの年齢が高くなればなるほど問題が複雑化し、修復していくためにはとてつもない時間と労力を要し、その途方もない作業の中、問題のタネが0歳児期にあることを確信しつつも、ただ目の前の子ども達の問題と格闘するのが精一杯の毎日でした。

ちょうどその頃、世間では『子育て支援』という言葉が盛んに使われるようになり、様々なサービスの支援が始まりました。私は、そのサービスの支援に対して「本当にこれでいいのだろうか?」という疑問を常に感じていました。「私達専門職が子育ての面倒な部分を親に代わって解決していくのは簡単だけど、いずれいやでも親自身が子どもと向き合わなくてはならない時が必ず来る。その時に乳幼児期の親子の関わりや葛藤の体験の貯金が少なくて大丈夫なのだろうか?」と。そして真の『支援』とは一体何だろうか?といつも考えていました。

0歳時期から苦しんでいる?!

その後、どういふご縁か教育委員会所轄の社会教育会館の保育室担当として異動になりました。ここでは子育て中の市民のために、講座や自主グループ活動に一定期間の保育をつけて学習の支援をしています。保育も同じ子ども達が同じ保育者と継続した期間を過ごすことで発達を保障し、親子ともに育つ場として位置づけています。

この保育付事業は人気で、講座の内容はもちろん、保育が目当てで申し込んでくる人も少なくあ

りません。年中無休24時間体制で必死に子育てしている専業主婦のお母さん達が「毎日の煮詰まっている親子関係からちょっと逃げたい」「とにかく子どもと距離をおきたい」と切実な思いで駆け込んできます。保育の条件のひとつに満1歳以上という年齢制限があるのですが、ここ数年1歳児の申し込みが急増し、中には昨日お誕生日を迎え1歳になりましたというお子さんも案外多いのです。この0歳時期からすでにお母さんが苦しんでいる現状をひしひしと感じ、とても気になっていました。

絶対にあきらめたくない

そんな折、NP(Nobody's Perfect)の同期からBPの話聞き、早速、東京の養成講座に飛びつきました。思春期を見越しての心の安定根づくり・支援に対する考え方など、まさに自分が探し求めていたもので、胸のつかえがいっぺんに落ちていくような内容でした。

このプログラムを是非今の職場で実施したい!BPは保育がないので予算の心配も少ない!終了後も参加者がうちの施設を利用してつながっていける!私も陰ながら見守っていける!意気込んで職場に戻り、すぐに当時の上司に相談しました。結果は「うちは教育の場(学習施設)であって子育て支援施設ではない」とあっさりお役所的な回答をいただき、プレゼン能力ゼロだった私はあえなく撃沈したのです。

私の職場は、専門職は私ひとり。あとは全員事務職で、しかも子育て経験のある女性職員も私だけ。専門職で構成されている保育園や児童館では「あ・うん」の呼吸で進められた仕事もここでは親や子どものことを丁寧に説明して理解してもらうことから始める必要がありました。職員間で親子関係に関する話題が挙がるたびに子どもの育ちのこと、親の悩みや苦勞など、親子のおかれている現状を知ってもらうよう努力しました。そして前回うまく説得できなかったのは『支援』という言葉に自分が縛られていたからだということに気がついたので、あえて『親教育』という言葉を使い、親の『学び』の場が今どれだけ必要とされているか、東京都の社会教育でも盛んに取り組み始めていることなどを引き合いに出して、じわじわと周りの意識が子育てに向くように仕向けながらチャンスを待ちました。



ついに実現!!

そしてその瞬間は突然やってきました。事業の見直し、BPに理解を示してくれた同僚達の後押

参加者にとっての安心・安全とは…?

し、人事異動…まるで今までかみ合わなかった歯車が1個はまったとたん次々かみ合わさっていくように、とんとん拍子に好転し、めでたく実施となりました。私の本業の都合上、7・8月の夏の実施となりました。

今回はBP同期のひとり、林いずみさんが共同FA（ファシリテーター）を引き受けてくださいました。心強い共同FAを得て、はりきって準備にとりかかってみると、参加者用テキストの購入方法や発注のタイミングなど自分でも情けなくなるぐらい、ごくごく初歩的な実務から「？」の連続で早くも落ち込みモード。2年前の養成講座のテキストを読み返してみても、不安が募るばかり…。まさに念願の赤ちゃんを授かったものの今後の先の見えない育児に不安を覚える新米ママと同じ心境でした。BP1期の仲間励まされ、恥を忍んで林さんと事務局にひとつひとつ訊きながら、何とか当日を迎えることができました。

7月23日午後1時過ぎ、炎天下にもかかわらず、赤ちゃんを抱いて額に玉の汗をかいて12人のお母さん達が元気に集まってくれました。私の緊張や不安などお構いなしにお母さんたちは積極的に発言し、どんどん仲よくなって、毎回とても楽しみに参加してくれました。



はしっかりとあったので、本人ではなくパートナーなら抵抗感なく、しかも同じ位の年代のパートナーを持つ人同士、親近感が湧いてさらに関係が深まるのではないかと安易に思ってしまったのです。結果はこちらの思惑通り、どのグループも話が弾み、パートナーの赤ちゃんへの関わり方の共通点などお互い共感して盛り上がっていました。

しかし、後日事務局から「本当に全員、話が弾んで楽しんでいただけでしょうか?」「参加者の安心安全を第一に考えるのなら年齢を聞くというのは子どもの年齢以外は避けた方が良く考えます」とのご指摘をいただき、それでよくよく考えてみたところ、今回はたまたま数人ずつバランスよく同じ年代の人達のグループができ、幸いにもそのことを気にしている様子の人もなく楽しそうに話していたけれど（これも一見そう見えただけ、余裕がなくて見落としていたかもしれないという不安は拭きません）、もし突出して年齢の高い（または若い）パートナーを持つ人が一人だけだったら…と思った時、ずい分危険なことをしてしまったということに気づきました。そして自分の「安心安全」に対する捉え方の甘さを思い知らされたのでした。

安心・安全・冷や汗タラリ…

そんな今回のBPのFA体験を通し、深く心に刻まれたことがあります。それは「BPにおける参加者の安心安全」についてです。今回、「安心安全」に纏わるふたつのできごとがありました。

ひとつはよりによって緊張感MAXの初回に起きました。今年の夏は猛暑に加え、天気が急転する日が多かったのですが、初回の交流タイムの最中に窓の外雲行きが怪しくなり、誰が見ても雷雨の前兆という状況になりました。遠くから参加している人から「洗濯物を外に干してきてしまったので帰りたい」という申し出があり、瞬時に私の頭の中はパニック状態。「雨具の用意もなさそうだし、赤ちゃんもいるし、早く帰りたいよねー」「でも交流タイムが全員参加になったのには意図があるのだから最後までいてもらおうべきなのかな…」空模様からして悩んでいる時間はありません。林さんと相談して、本来は2時間のプログラムですが、とお伝えした上で必要に応じて帰っていただくことにしました。

この件については後日、事務局から「参加者の安全が大切なので、これはこれでよかったと思います」との回答をいただきほっとしました。そして次の回からお母さん達は各自雨具を持参してくるようになり、思わぬ体験学習の効果を得ました。

もうひとつのできごとは、アイスブレイクの『なんでもチェーン』でした。いくつかのお題のあとに『パートナーの年齢順』でグループ分けをしました。本人の年齢はよろしくないという認識

親もFAも成長途上

そんな危ない橋も知らずに渡ってしまう若葉マークの拙いFAでしたが、ふと気がつくと12人のお母さん達が12人の赤ちゃんをわが子同様愛おしげに見つめ、ひとつのチームのように面倒を見合っている姿がありました。参加者の皆さんはそれぞれ自分の力でしっかりと何かをつかみ取ってくれていたようです。そんな微笑ましい光景に、いろいろあったけど、やってよかったなーと安堵しました。笑ったりへこんだりしながら無我夢中で進めた4回でしたが、実践を終えてみて各回のプログラムがいかに優れたものかをあらためて実感しています。各回の目標をしっかりと捉え、プログラムを信じて進めていけば間違いないということがよくわかりました。今後もこの初心を忘れず、専門職であることのおごりを捨て、素直に忠実に参加者の皆さんと一緒にプログラムを進めていくよう心がけたいと思います。

参加者の皆さん、職場の仲間、BPの同志、いつも温かい笑顔でさりげなくフォローしてくれた林さん、的確なアドバイスをくださった事務局のみなさん…BPというご縁でつながったたくさんの方の支えがあったからこそ最後まで頑張ることができました。このつながりは私の大切な宝です。

充実した夏が終わり、あつという間に秋の気配。また来年度に向けての事業計画を立てる時期になりました。今回の実施をきっかけにBPをより多くのお母さん達に届けることができるよう、今後も一歩一歩前進していこうと心新たにしているところです。